



只見短歌会

令和八年六月詠草

勝負ごとに理解はあれど負けて泣く孫の泪に我も泣きたし
目黒 富子

思ひだけ先走り行き悶々と今の自分を忘れ去ること
関谷登美子

梅雨晴れ間跳ねゆく息子水たまりしぶきの音に笑みのこぼるる
立花 奏音

一歳の弟の成長に感動し涙流すは五年生の兄
新国由紀子

毎日の暑さ続けば土乾き畑の作物水不足となる
渡部ヨリ子

只見俳句会

六月定例会

抱きしめる孫の手に汗夏木立
修 一

夏草や幾星霜の五稜郭
信

只見線緑の溪を抜けていく

父の日や横座ゆずれぬ八十路かな
都

春野菜栽培せんと畑に立つ

雲うすく^{むし}筆^{あおね}つて見たい青嶺かな
味代子

甘酒や飲む点滴と続く朝

路線図はパズルの如し夏帽子
一 恵

目ざとしやトビゲラ筒巢次々と

シロツメクサ茶碗に入れしおもいでや
真理子

春の月愛の石橋続く道
睦 子

春愁や猫がしやぶるか足の指

蜻蛉^{とんぼう}や草の葉揺れる日暮れなる
尚 幸

伊南川の岩陰めがけ山女釣り

畑作業待ちに待ったり喜雨の雨
理恵子

空き家にも薔薇一輪咲きにけり

